46　自立訓練（機能訓練）利用者の上肢機能評価に関する研究所との取り組み

篠塚裕美[1)]、水谷とよ江[1)]、橋本珠美[1)]、関晃人[1)]
石井大樹[1)]、中川由佳[1)]、志水宏太郎[2)]、河島則天[2)3)]
1）自立支援局 第二自立訓練部 肢体機能訓練課
2）研究所 運動機能系障害研究部
3）病院 リハビリテーション部 再生医療リハビリテーション室

【はじめに】

自立訓練(機能訓練)では、慢性期頚髄損傷者を主な対象として機能訓練サービスを提供している。作業療法部門では2021年度から研究所運動機能系障害研究部と連携し、利用者の上肢機能評価を行ってきた。当初、臨床研究としての取り組みから開始したが、2023年度に評価内容を整理し、業務範疇での有益な評価へと移行すべく相互協力のもと定期的な評価、訓練部門のミーティングでの情報共有を進めている。本発表では、これまでの取り組みを振り返り、現在実施している評価内容の概要を報告する。なお、本発表は当センター倫理審査委員会の審査において承認を得て実施している（承認番号2024-014)。

【取り組み内容】

対象は2021年4月以降に入所した四肢麻痺の利用者とした（担当OTが上肢機能検査困難と判断した者、評価期間中に入院した者、研究の同意が得られなかった者除外)。連携業務開始時の評価項目は、徒手筋力検査（MMT)、Manual Function Test（MFT)、簡易上肢機能検査（STEF)、上記評価時の筋電図測定である。利用開始後1か月以内に実施する初期評価、利用終了前1か月の期間に実施する終期評価の結果を肢体機能訓練課のカンファレンスにおいて共有し、内容検討を進めてきた。連携開始後2年間が経過した時点で、連携業務・評価内容の見直しを行い、肩肘関節の協調動作を評価可能な円描画課題、手指機能を評価可能な把持力計測課題を追加するとともに、STEF 評価については動作観察を通した機能改善の裏付けを図れるなど臨床上で有用であると考え、OT訓練時間内にOTが実施する流れとなった。

【結果】

連携業務開始より現在（2021年4月1日～2024年8月31日）までの評価実施総数は69名（頚髄損傷運動完全麻痺30名、頚髄損傷不全麻痺34名、その他の疾患5名)、80件（初期69件、終期11件）であった。STEF では、完全麻痺者と不全麻痺者を比較した結果、不全麻痺では得点が各項目に分散するのに対し、完全麻痺では中球や小立方で加点しやすいことがわかった。また、完全麻痺者の中ではZancolli分類C6B2以上で加点が多いことがわかった。カンファレンスでの活用において、臨床上では関節運動が起きていない筋においても筋電図では反応があること等がわかり、機能を最大限活かすことや目標設定を行う上で話し合いに有効であった。

【今後の展望】

頚髄損傷者の上肢機能の特徴や傾向を定量的に評価することは、目標設定や訓練効果の判定などに有用であると思われる。今後もデータ蓄積を続け、頚髄損傷者のリハビリテーションに活用していきたい。